

① マーちゃんといつも遊んでいる仲間が、せいの高い花島君とハイソックスが好きなクニスケ。それに、アラマちゃんだ。本当は荒井さんというのだけれど、口ぐせが「あらま。」だから、いつのまにか、そうよばれるようになった。四年生になって、クラスは別々になったけれど、それまではずっと同じクラスで、家も近かったからいまだに仲良しだ。

② マーちゃんたちが集まる場所は川ぞいの公園で、バスケットコートぐらいの広さしかない、公園は、何も植えられていないかだんで、プラタナス公園とよばれている。中学生や幼児連れの母親などはめったに来ないから、マーちゃんたちは、自分たちの遊びができた。水飲み場があるのも助かるけれど、何よりうれしいのは、この公園では、時間によってはボール遊びができることだった。他の公園では、ボール遊びは禁止なのだ。

③ 最近熱中しているのは、サッカー。リーダーはクニスケだ。クニスケは、サッカーをするときは、ハイソックスの中にすね当てを入れる。本格的なのだ。二人がゴールキーパーと守りになり、二人がドリブルやパスをしてせめる。かだんとかだんの間に二メートルぐらいの空間があつて、そこがゴールだ。

④ つゆ明けのころからだろうか、プラタナスの木の下にある、古い小さなベンチにおじいさんがやって来て、にこにこしながら、マーちゃんたちのサッカーをながめているようになった。

⑤ 試合が白熱してくると、ときどきパスやドリブルのコースが外れて、プラタナスの木の下にボールが転がっていくことがある。そういうとき、おじいさんは、こしをかがめてボールを大切そうにつかみ、そのままじっとしている。

「こうしていないと、どっちかが有利になってしまうかもしれないからね。」

おじいさんは、そう言って笑う。

⑥ そのうちに、マーちゃんたちとおじいさんはだんだん親しくなり、サッカーにつかされると、みんなプラタナスの木の下に集まつて、おじいさんと話をするようになった。おじいさんが「みんな水をもつとたくさん飲んで、少し日かげに入つて休まない」と熱中症になるよ。」と言ったのがきっかけだった。太陽の光が夏に向かつてずんずん強くなり、大きな葉のプラタナスの木の下が、とてもよい日かげになるのだ。

⑦ おじいさんの話はいつもおもしろかった。

⑧ ある日、おじいさんは不思議なことを言った。

「このプラタナスの木が、さか立ちしているところを考えたことがあるかい。」

「あらま。木がさか立ち。」

⑨ アラマちゃんが、いつものようにおどろいた。

「そう。この木がさか立ちするだろう。すると、木のみきや枝葉と同じぐらいの大きさの根が出てくるんだよ。木というのは、上に生えている枝や葉をささえるために、土の中でそれと同じぐらい大きな根が広がつて、水分や養分を送っているんだ。」

「どの木もみんなそうなんですか。」

今度は、花島君がマーちゃんの頭ごしにきいた。

「たいていの木は、大きな根が地面の下にぎっしり広がっているのさ。だから、このプラタナスの木が公園全体を守っている、といつてもいいくらいだ。もし、地上のみきや枝葉がなくなつたら、根は水分や養分を送れなくなつてしまつてしまうんだ。」

⑩ マーちゃんと花島君とクニスケは「ふうん。」と同じような声を出したが、アラマちゃんはやっぱり「あらま。」と言つた。

⑪ それにしても、木の根がこまつてしまふなんて、初めて聞く話だ。おじいさんの話を聞いていると、おじいさんは、公園のできるずつと前からプラタナスのことを知っているみたいだ。

⑫ 夏休みに入るとすぐ、花島君とクニスケはお母さんのふるさとに帰省し、アラマちゃんは、家族と海外旅行に出かけてしまつた。一人残つたマーちゃんがプラタナス公園に行くと、いつものようにおじいさんがやって来て、ベンチにすわつた。マーちゃんは、自分ももうすぐお父さんのふるさとに行くので、夏休みが終わつたら、またみ

んなで来るから、と言つた。

「お父さんのふるさとには、木がいっぱいあるだろう。みんなによろしく。」

⑬ おじいさんは、にっこり笑つた。

⑭ 夏休みも半ばというころ、マーちゃんは、祖父母の家に行った。家の中には森が広がっている。森にはいろいろな木や草が生え、鳥やせみの声が満ちていた。森と森の間には小川が流れ、小さな魚が、ときどき白いはらを見せてきらりと笑つた。マーちゃんは、この森の中で毎日走り回つて遊んだ。

⑮ マーちゃんが祖父母の家に来て一週間ほどたつたある日、大きな台風が森をおそつた。森はおこつたようにゆれ、小川は濁流となつてあばれた。鳥やせみも、どこかにすがたを消した。テレビは、今年いちばんの強い台風だと伝えている。早々とふとんに入ったマーちゃんは、ゴーゴー鳴りひびく台風の音を聞きながら、プラタナス公園のおじいさんの顔を思いうかべた。最初ははつきりしていたおじいさんのえがおが、しだいにぼんやりとしていく。マーちゃんは、いつしか深いねむりに落ちていつた。

⑯ 一夜明けると、台風は通りすぎていた。青く晴れ上がった空の下で、あんなにゆれていた森は、今は静かに太陽の光を受けてびかびかかかやいている。小川はまだ濁流のままだったけれど、鳥やせみはうれしそうに鳴き始めている。マーちゃんは、おじいさんの言葉を思い出した。森の一本一本の木の下には、それと同じぐらい大きな根が広がっている。マーちゃんには、なぜか今、それがはつきりと見えるような気がする。だから、強い風がふいても木はかんたんにはたおれたりはいし、森もくずれたりしないのだ。一本一本の木とその根が、ずっと昔から森全体を守り、祖父母の家だつて守つてきたのだ。

⑰ 長い夏休みが終わわり、新学期が始まつた。

⑱ プラタナス公園の異変を最初に知らせてくれたのは、ハイソックスをずり落としながら走つてきたクニスケだった。プラタナスの木がなくなつている、というのだ。放課後、四人はプラタナス公園に走つた。

⑲ 本当だった。マーちゃんが、お父さんのふるさとで台風にあつていたころ、当然だけれど、この公園も台風におそわれていたのだ。近所の人に聞くと、プラタナスがたおれかかつてきけんだったのだという。マーちゃんたちがいない間に、大きなプラタナスは切りかぶだけを残して消えてしまつていた。その横には、強い日を浴びて、ベンチがぼつんと置かれていた。

⑳ 公園は、立ち入り禁止になつていた。

「根は、ほられてはいないみたいだ。でも残つた根っこはきつとこまつているんだろうね。」

花島君が、かたを落として言つた。アラマちゃんは、いつもの口ぐせを言わずにだまつている。

㉑ 立ち入り禁止がとけて、また、マーちゃんたちは、公園に遊びに行くようになった。木が切られてから、おじいさんは公園にすがたを見せなくなつていた。サッカーも前ほど白熱しなくなり、マーちゃんたちは、おじいさんがいつもすわつていた、日かげのなくなつたベンチにだまつてすわりこんだ。だまつているけれど、みんなが何を考えているかは分かる。

㉒ そんなある日、ベンチにすわつていたマーちゃんは、思いついたように、プラタナスの切りかぶの上に立つてみた。今でも地下に広がっている根のことを想像していたら、そうしたい気持ちになつたのだ。

㉓ 花島君が不思議そうに見ていたので、

「おいでよ。なんだか、根にささえられているみたいだよ。」

と言うと、花島君だけではなく、クニスケもアラマちゃんも切りかぶに乗つてきた。

㉔ せいの高い花島君を真ん中にして、両手を広げてプラタナスの切りかぶに乗つていると、みんなが木のみきや枝になつたみたいだ。

㉕ プラタナスは切りかぶだけになつたけれど、ぼくたちのプラタナス公園は変わらない。春になれば、プラタナスも芽を出すだろう。そうすれば、きつとまた、おじいさんにも会える。それまでは、ぼくたちがみきや枝や葉っぱの代わりだ。そう思いながら、マーちゃんは大きく息をすつて、青い空を見上げた。